

モンテッソーリ教育法におけるトーンバー指導法

—*Costruisco la scala* (1956) の検討を通して—

藤 尾 かの子

(エリザベト音楽大学)

Use of Tone Bars in the Montessori Method through an Examination of *Costruisco la scala* (1956)

Kanoko FUJIO

Abstract

This study aimed to distinguish the characteristics of the guidance provided by tone bars in the Montessori Method through an examination of documents written by A. M. Maccheroni. Throughout her life, Maccheroni collaborated with M. Montessori. Maccheroni contributed to the development of music education in the Montessori Method. Tone bars and bells are educational materials employed in the Montessori Method, and the use of tone bars was introduced by Maccheroni. This study found that by using tone bars, it was Maccheroni's intention that children should acquire specialized knowledge of music, including writing and reading music and musical theory. Furthermore, the guidance provided by the tone bars follows a system like that with the guidance provided by bells. However, there is a difference between them: the guidance provided by tone bars relates to teacher-centered education, whereas the guidance provided by bells conforms to child-centered education.

1 研究の目的と背景

A. M. マッケローニ (Anna Maria Maccheroni, 1876–1965) (以下、マッケローニ) は、新教育運動を代表する教育法の1つとして世界中に広まったモンテッソーリ教育法の考案者であるM.モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870–1952) (以下、モンテッソーリ) の生涯を通しての協力者として、モンテッソーリ教育法 (以下、メソッド) の考案に寄与した人物の1人である。マッケローニは、モンテッソーリ教育法を構成する分野のなかでも、とりわけ音楽教育の考案に尽力した。すなわち、モンテッソーリ教育法が確立されていくなかで考案された音楽教育に関する史料の大部分は、マッケローニによって著されたものである¹。

音楽に関わる活動のために用いられるモンテッソーリ教具として広く知られているものに、音感ベルが挙げられる。モンテッソーリ教育法の音楽教育では、音感ベルが基礎的な教具として位置づけられており、音感ベルを用いた活動を通して、幼児が正確な音高感覚を養うことを1つの目的として設定されている。この音感ベルの発展的な教具として位置づけられているものが、本研究で焦点を当てるトーンバーである。トーンバーは1914年にモンテッソーリによって紹介され、その活動内容及び指導方法はマッケローニによって考案された。それらをまとめたマッケローニの著作物が、本研究で検討する *Costruisco la scala* (1956) である。本著作は、トーンバーの活動内容及び指導内容のプロセスが明示されており、主に教育現場の教師用に作成された指導書としての役割を果たすものである。

以上のように、マッケローニはモンテッソーリ教育法における音楽教育についての史料を数多く遺しているにもかかわらず、わが国におけるモンテッソーリ教育法を実践している教育現場での音楽教育の現状は、その他の分野と比較して未開拓の部分が顕著である。その原因は各々の教育現場において多種多様で

あるが、出版されているモンテッソーリの著作物には、モンテッソーリ教育法における音楽教育の一部分しか明示されていないこと、マッケローニの史料は一般に公開されていないこと、加えて、モンテッソーリ教師養成コースではモンテッソーリ及びマッケローニの考案した音楽教育の教授が一部の内容に留まっていることは、共通した要因である。このようなことが原因となって、わが国におけるモンテッソーリ園では、音感ベルの活動でさえも基本的な教授内容に留まった状況であり、さらに本研究で取り上げるトーンバーの活動内容はほとんど実践されていない。

モンテッソーリ教育におけるマッケローニの音楽教育に関する研究として、Miller(1981)、東屋敷(2012)、及び藤尾(2014)等が挙げられる。Millerは、モンテッソーリ教育園における自身の保育現場での経験と、マッケローニらの史料をもとに作成した、独自の音楽プログラムを提案している。東屋敷は、モンテッソーリ教育における音楽指導が、幼児期から児童期にかけて系統的に構成されていることを明らかにし、これらの音楽指導の方法をわが国に導入することの可能性について言及している。しかし、これらの先行研究では、マッケローニによるトーンバーの指導法についてはその一部のみ取り扱われているため、未着手の側面が見られる。

以上のことから、本研究では、藤尾(2014)で検討したマッケローニの音感ベル指導法が明示されている *Orecchio, voce, occhio, mano* の続編である、*Costruisco la scala* (1956) を検討することによって、マッケローニの音楽指導法のなかでも、とりわけトーンバーの指導法の内容及び特徴を明らかにし、モンテッソーリ教育法においてどのように位置づけられていたかを明らかにする。それによって、未だ解明されていないモンテッソーリ教育法における音楽教育の一部を明らかにすることを目的とする。

2 モンテッソーリ教育法における音楽教育の位置づけ

(1) モンテッソーリ教育法の目的と方法

モンテッソーリが教育法の考案に着手した19世紀末から20世紀初頭には、教育のすべてを児童の積極的な興味と活動への主体的な取り組みを中心として構築しようとする教育の新たな流れがあった。このような教育界の動向のなか、モンテッソーリが提唱した教育方法、すなわち、子どもを医学的な見地から観察することを基点として、子ども個人の発達のプロセスを重視し、教具を通して教育を行うという自己教育の方法を打ち出したことは、それまでの教育観や子ども観を含む教育界に新風を吹き込んだ。

モンテッソーリの独自性は、彼女自身の科学的な観察をもとに打ち出した3歳から7歳までの子どもの多様な機能をもとに教育法が考案されている点にある。この機能として、彼女は、(1) 身体のバランスを取り、歩き、動き方を調整する運動筋肉機能、(2) 環境からさまざまな印象を感覚的に受け取り、観察、比較、判断を繰り返すことによって知性を確立するという感覚機能 (Montessori, 1914, pp.6-7) の2点を明示しており、これらに付随して、子どもは言葉を習得していくと述べている (Montessori, 1914, p.7)。特筆すべきことは、上述した子どもの機能の発達は、各々の子どもによって異なってあらわれるものであるため、個人の発達段階を第一に考慮し、各々の子どものペースに合わせることを重要視するという、モンテッソーリの教育理念が中核にある点である。それゆえ、保育環境には常に自由が伴われる必要性が強調されている (Montessori, 1914, p.77)。この自由とは、子どもが自分の興味関心に従い、自分で取り組みたい活動(教具)を選択し、さらにそれを自分のペースでやり遂げる環境が設定されていることを意味する (Montessori, 1914, p.78)。

以上のようなモンテッソーリの教育理念を中核として、モンテッソーリ教育法では、子どもの運動筋肉機能及び感覚機能を、科学的な方法を用いて向上させることによって、子どもが自己の内面から表れる自然の法則に従いながら自己を構築させていくことが、最大の教育目的として掲げられている。

(2) モンテッソーリ教育法の構成と音楽教育の位置づけ

モンテッソーリ教育法を構成する分野は、1907年にメソッドが実践されてから現在に至るまで、その活動内容の充実を図ったことにより、変化し続けている。そこで本節では、モンテッソーリ自身がメソッドにおける音楽教育の内容が充実し始めた時期と提言している (Montessori, 1917, p.319) 1914年当時における分野と、そのなかにおける音楽教育の位置づけを明確にする。

幼児を対象としたモンテッソーリ教育法は、4 分野（日常生活、感覚、言語、数）で構成されている。モンテッソーリは、これら 4 分野の活動を通して、幼児期の子どもの生理学的及び身体的な発達に対応させながら、自然な成長を促すことを意図した（Montessori, 1914, pp.17-18）。以上の 4 分野のなかで、音楽教育は、主に日常生活と感覚分野が基盤となって展開されている。とりわけ、日常生活の分野に位置づけられている「静粛の練習」では、実際の楽音を取り扱う前段階として、子どもが周囲の音を集中して聴く（聞く）という態度を身に付けることや、自らの意志で運動の調整を行う身体づくりが目指されている。感覚分野には、音感ベルの活動が含まれおり、活動のプロセスが進むと音楽教育へと発展していく。よって、以下に感覚分野の概要を述べ、その後に、音感ベルからトーンバーの活動へと移行するプロセスを概観する。

モンテッソーリは、3 歳から 5 歳の幼児期の子どもは、内面に秩序感を培う特性があるという論を自らの観察によって打ち出した。そして、その秩序感をモンテッソーリの独自の教育によって子どもの内面に培う教育体系を考案したのである。その最たる例が、感覚分野である。感覚分野の最大の特徴は、系統的な教具体系と、一貫した教授方法である。

感覚教具の定義として、モンテッソーリは、人間が五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）を用いて感じ取る、環境に介在するさまざまな刺激を、具体物として段階的に表したものであると述べている（Montessori, 1912, p.169）。この感覚教具を用いて活動を実践することによって得られる教育的効果としては、子どもが事物の差異から同一性を見出すことや、質や量の概念をもとにして、表面、色、大きさ、形、及び音等から感じ取る性質を、観察、比較、分類させることだと述べている（Montessori, 1914, p.84）。この感覚教具を用いる教授方法のプロセスは、「(1) 同一物の認識（同じ物を対にする）、(2) コントラストの認識（同じ性質の教具において両極端のものを提示する）、(3) 最も差異のない物を識別する」（Montessori, 1914, pp.59-60）という 3 つの段階を含んでおり、どの感覚教具を用いた活動であっても、この教授方法が一貫して適用される。

音感ベルの活動では、上述した教授方法を用いて、最終的に子どもが聴覚だけを用いて C dur の音階を構成する音を聴き分ける力を培わせること、加えて、感覚的に内面に蓄積した音に音名を一致させて認識させることが目指される。このようなことから、本研究で焦点を当てるトーンバーを取り扱う段階に達している子どもは、すでに音感ベルの活動を通してこれらの力が培われていることが前提である。トーンバーは白と黒に着色されていることを除くと、音感ベルと同様、外見上同じ形であるという特徴を有している。トーンバーの指導法の詳細については後述するが、トーンバーと音感ベルとは活動目的が異なり、トーンバーは上述した感覚分野それ自体の教育目的からは外れている。

このように、モンテッソーリ教育法における感覚分野では、体系的な教育内容が設定されているが、モンテッソーリは子どもに技術や知識を習得させることを目的としたのではなく、子ども自らの内的な衝動から表れる精神活動を通して、自分自身を築き上げることを目指していたことは強調する必要がある。

3 モンテッソーリの音楽教育論

以上に述べたように、モンテッソーリは、子どもが生活するなかで活動の判断基準となるように、幼児期に各々の感覚を用いて正確な感覚を培うことを目指す指導法が適切であるとした。音楽教育においても、感覚教育がその根幹に据えられていることをモンテッソーリは強調している。その意義として、彼女は、「私たちは、子どもが個々の音を（内的に）記憶した後に、連なった音（音階）を学んでいくことを音楽教育の目的としている（Montessori, 1917, p.364）。」とし、さらに、「正確な音高を認識することは、ごく限られた人にしか持ち合わせていない力である。正確な音高感覚を身に付けることが有効な時期は幼少期であるので、この時期に感覚の教育が欠如していると、音高感覚を培うことは不可能である。音高感覚が身に付いていない場合、私たちは記譜の力を借りて音を学ぶことを余儀なくされている。（中略）五線譜上の音名や音符の位置や調性を知らずとも、（音楽を学ぶ上で）感覚的に実際の音を記憶していることが肝心である（Montessori, 1925, p.1）。」と述べている。これらのことから、モンテッソーリは、音楽教育のためには、幼児期に感覚教育に共通する方法で音感ベルを用いて正確な音高感覚を身に付けさせることを重要視していたことが分かる。さらに、ここで特筆すべきことは、感覚教育に共通する要素である、事物の持つ

同じ性質の刺激を段階的に捉えさせる方法を、音楽教育においても同様に取り入れていた点である。すなわち、音楽教育では音階を構成することがこれに該当するのである。

このように、音楽教育において音階を用いる意義について、彼女は、「特別な魅力は、8つの音感ベルの音高が順序通りに置かれている際の連続的な音において見出される。つまり、子ども自身が音階を聴くことに魅力があるということである (Montessori, 1917, p.323)。」と述べている。彼女のこの論述は、子どもの自発的な活動のなかで、子どもは秩序感を求めるという性質を有するという、彼女自身の観察が基礎となっている。このようなことから、モンテッソーリは、音の世界で秩序的なものと換言できる、音階に着目し、子ども自身が教具を用いて音階を構成することを可能とした音楽教育のプログラムを考案した。

以上のような理念をもとに、モンテッソーリはマッケローニとともに、主に小学校の教育課程で用いられる、トーンバーの考案に着手した。著書のなかでトーンバーが初めて紹介されたのは、1916年に出版されたモンテッソーリの著作物、*L'autoeducazione: nelle scuole elementari* である。本著において、彼女は、幼児から児童期へと学習に段階性を持たせるために、あらゆる音階を構成することのできるトーンバーを考案したと述べている (Montessori, 1917, p.319)。ただし、トーンバーを用いた活動内容やそのプロセス等に関しては、マッケローニが担当している。

4 マッケローニの音楽指導法

先述したように、マッケローニはモンテッソーリから依頼され、モンテッソーリ教育法における音楽教育の内容の充実を図った。そのため、当然のことながらマッケローニの音楽教育の基礎には、先述した静粛の練習や音感ベルの活動が位置づけられている。ただし、モンテッソーリは幼児期の子どもは音高感覚を身に付けることが最も重要であるとしていたのに対し、マッケローニはそれを基盤としながらも、後に続く音楽の学習過程において、音楽の諸要素を学ぶために音楽理論の学習や記譜・読譜を重要視した。

このことが顕著にあらわれている彼女の論述として、話し言葉の文章の構成を引き合いに出しているものが挙げられる。彼女の、「スピーチで言葉を使用するのと同様に、旋律では音符を使用する。スピーチにおいて、各々の言葉それ自体に意味があるが、その言葉は全ての文章にその意味が適合している。私たちはそれぞれ離れている言葉を聞くのではなく、スピーチ全体の意味することを聞くのである (Maccheroni, ndb, p.7)。」という論述から、音楽を構成する音楽の諸要素 (音価、音程、ダイナミクス等) や、音楽記号や音楽用語といった音楽的な言語を理解する過程を経てこそ、音楽全体への理解を深めていくことが可能となる、と考えていたことが分かる (藤尾, 2015, pp.120-121)。

以上のような理念を中核として、実際の教授内容では、「静粛の練習」、「音高及び音価の識別」、「歌唱」、「読譜・記譜」、「音楽理論」、「リズム活動」、「音楽鑑賞」、「基礎的な楽器演奏」、「作曲」、等の活動が行われる (藤尾, 2015, p.121)。これら全ての教授内容に共通して、子どもが教具・教材を用いることによって感覚的に音楽の諸要素を習得することや、教師の演奏を聴くことで身体の動きを合わせていくというような、体験的な音楽活動を通して、次の段階で、記譜、読譜及び音楽理論の学習へと移行していくことが特徴である。

5 *Costruisco la scala* (1956) におけるトーンバー指導法

(1) トーンバーの特徴と基本的な使用方法

先述したように、*Costruisco la scala* は、音感ベルの発展的な教具として位置づけられているトーンバー指導法を取り扱っていることから、音感ベル指導法について詳細に記されているマッケローニの著作物、*Orecchio, voce, occhio, mano* の続編として出版された (Maccheroni, 1956, n.pag.)。 *Costruisco la scala* では、トーンバーを用いて音階を構成することや、音階の理論的な理解を深めていくことに焦点が当てられており、当然ながら音感ベルの学習目的とは異なる。しかし、これら2つの教具は共通した特徴を有している。

例えば、上記2つの各々の教具は、外見上どれも同一の形状である。これは、子どもが目で音の判断をするのではなく、耳だけを用いて音を聴き分けることを重要視したモンテッソーリの意図が教具に現れている。ただし、トーンバーは音感ベルよりも取り扱う音域が幅広く、C4を基点として2オクターヴ先の

C6までの音が鳴る教具である。このような特徴を有することから、トーンバーは、あらゆる音階を構成することが可能となる。また、木琴を想起させるような音色を持つ教具である。

その他の特徴としては、写真1及び写真2に示されるように、トーンバーは、鍵盤楽器の黒鍵及び白鍵と同様に着色されているのが特徴である。これは、トーンバーを用いた学習目的の1つとして、音階の構造について理解を深めていくことが設定されていることに起因する。

写真2に示されるように、トーンバーは音の並びに沿って配置されており、無秩序に並べられることはない。例えば、E durの音階を構成する場合、E4よりも前に位置するトーンバーを全て取り除く。その取り除いたトーンバーは、音階の並びに沿った状態で側に置く。そして、C4が位置していた場所、すなわち、写真2が示す1まで、E4を主音としてその他のトーンバーを配置させる。白い場所に置かれているトーンバーを選択して鳴らすと、E durの音階を得ることができる。

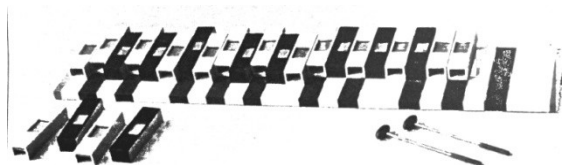


写真1 トーンバー
(Montessori, 1917, p.334 より転載。)

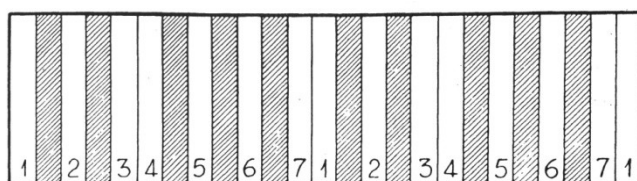


写真2 トーンバーの土台
(Maccheroni, 1956, p.7 より転載。)

(2) トーンバーの活動目的と活動内容

マッケローニが音階の学習内容を自身の音楽教育に取り入れた理由として、マッケローニ自身の教育実践を通して、子どもは音階を聴くということを好む性質を有する (Maccheroni, nd, p.32) と述べた上で、トーンバーの活動目的として、①子どもが旋律を聴き、それを深く理解するための鍵として様々な種類の音階を学ぶことが適切であるということ (Maccheroni, nd, p.36)、②移調の理論を学ぶこと (Maccheroni, 1956, n.pag.)、③音階を用いて記譜・読譜力を培わせること (Maccheroni, nd, p.32) の3点を挙げている。また、トーンバーの学習の対象年齢は、5歳から7歳と設定されている (Maccheroni, nd, p.4)。

以下に示す表1は、*Costruisco la scala* に示されている主な活動内容であり、エクササイズとしての活動内容は表2に示すとおりである。なお、活動過程は、活動項目に示す順序のとおりである。

表1 トーンバーの活動内容

活動項目	活動内容
1)長音階をその他の長音階に移調する	土台(写真2)を基準として長音階を構成した後に、トーンバーを用いてその他の長音階に移調し、その音階を歌う。
2) 短い歌を移調する	トーンバーを用いて子どもが慣れ親しんでいる長調の歌を移調する。その後、それを歌う。
3) 長音階の構造を学ぶ	表(写真3)を用いて、長音階を五線譜に記譜する。
4) 和声短音階を構成する	トーンバーを用いて和声短音階を構成する。
5) C durの音階を同種短調の和声短音階に変化させる	トーンバーを用いて、C durの同種短調の和声短音階に移調する。
6) 和声短音階の構造を学ぶ	表(写真4)を用いて、和声短音階を五線譜に記譜する。
7) 旋律短音階から自然短音階に変化させる	トーンバーを用いてC durの音階を旋律短音階(a moll)に変化させた後に、Aを主音とする自然短音階に移調する。
8) 旋律短音階の上行形と下行形を捉える	トーンバーを用いて、Aを主音とする旋律短音階の上行形と下行形を構成し、音を鳴らす。
9) 旋律短音階の構造を学ぶ	表(写真5)を用いて、視覚的に旋律短音階を捉える。

(Maccheroni, 1956, pp.8-25 より筆者作成。)

MODELLO DELLA CARTA PREPARATA PER LE SCALE MAGGIORI

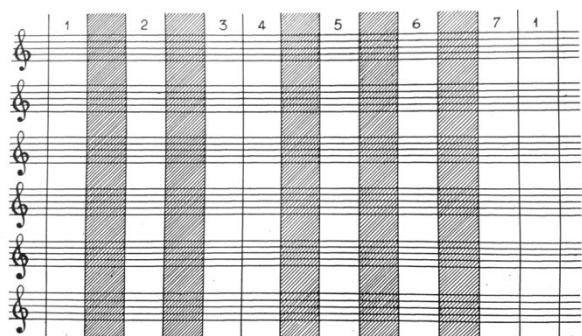


写真3 長音階の表

(Maccheroni, 1956, p.13 より転載。)

MODELLO DELLA CARTA PREPARATA PER LE SCALE MINORI ARMONICHE

LA TONICA DELLA MAGGIORE

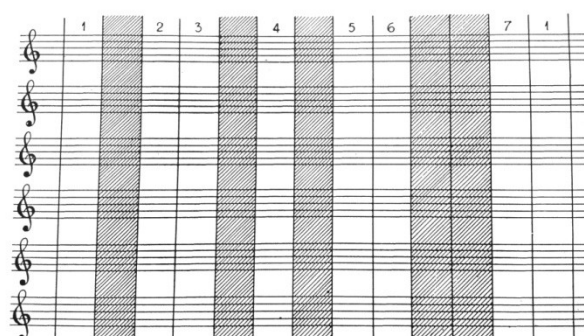


写真4 和声短音階の表

(Maccheroni, 1956, p.21 より転載。)

MODELLO DELLA CARTA PREPARATA PER LE SCALE MINORI MELODICHE

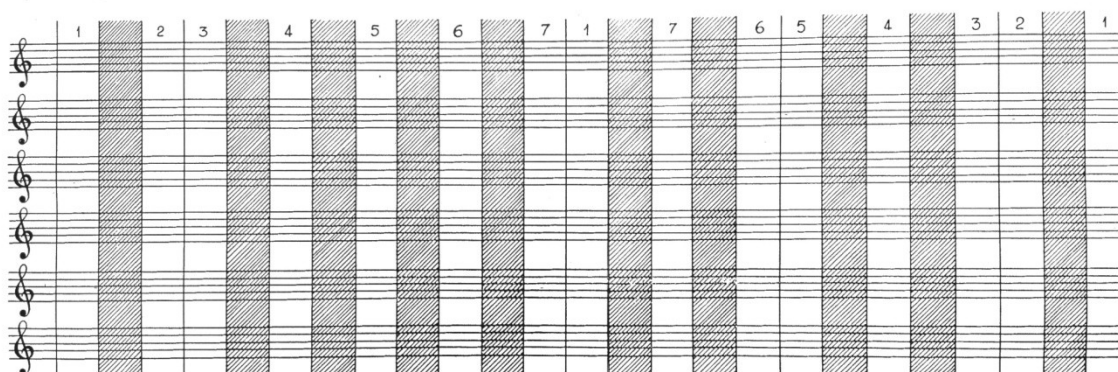


写真5 旋律短音階の表 (Maccheroni, 1956, p.27 より転載。)

表2 トーンバーのエクササイズの内容

- 子どもが音階に興味を持った場合、何度かその音を鳴らすことが重要である。
- our song (曲名) と、この曲の調性の音階を聴き比べよ。その後、それらを記譜しなさい。
- 基準となる短音階を、その他の短音階と比較せよ。これと同様の内容を、長音階を用いて行いなさい。
- シャープとフラットの位置を正確に書きなさい。長音階は、主音を基準として3番目と4番目の間に、また、7番目と8番目の間に2つの半音がある。
- 何の援助もなく音階を記譜しなさい。頭のなかで音を再生させることによって間違いを訂正しなさい。
- トーンバーで構成した音階が正しいかどうか、カード(写真6)を用いて確認しなさい。
- 和声短音階における半音について確認せよ。
- 旋律短音階における半音について確認せよ。
- 副教材を使用せずに、和声短音階と旋律短音階を構成し、さらにそれらを記譜しなさい。

(Maccheroni, 1956, p.31 より筆者訳出。)

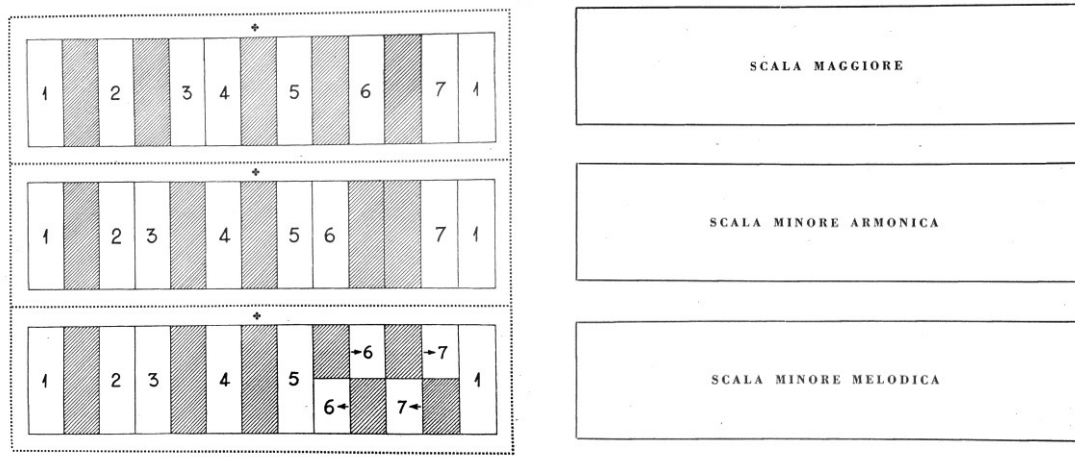


写真6 活動の確認用のカード (Maccheroni, 1956, n.pag.より転載。)

トーンバーの活動において取り扱われる音階は、長音階、和声短音階、旋律短音階の3つである。表1を概観すると、1)と3)の活動では、トーンバーで構成したC durの音階を基準として、その他の長音階を構成し、それを聴くこと、及び構成した五線譜に記譜することを通して、全ての長音階における音程が同じであることを学ぶ内容が示されている。さらに、これらの活動のなかで、子どもは音階を構成すると、必ずそれを声で再生するように示されており、正確な音高で歌うことも目指されている。2)の活動は、子どもが保育のなかで歌っている曲を移調し、それを歌うという内容である。和声短音階を取り扱う4)から6)の活動では、トーンバーを用いて、C durの音階をc mollの音階へと変化させる活動を基礎として、長音階から和声短音階へと変化させる方法を学んでいく内容が示されており、さらに、その音階独自の音色を聴き分ける活動内容が示されている。その次の段階で、トーンバーを用いて構成した和声短音階を五線譜に記譜する理論的な学習へと移行する。旋律短音階を取り扱う7)から9)の活動内容に関しても、4)から6)と同じ活動過程を辿る。

表2の内容を概観すると、変化記号の書き方に関する詳細や、写真3から写真5に示した五線譜の表ではなく、単純な五線譜を使用して記譜することが強調されている。このことから、表1に示された活動内容を通して子どもが習得した移調の理論や、感覚的に内面に蓄積された各々の音階の音の感覚をもとに、教材に頼ることなく、自力で様々な音階を記譜する活動内容が際立って示されていると言える。

6 トーンバー指導法の特徴

以上、*Costruisco la scala*に示されているマッケローニによって考案されたトーンバー指導法を検討した結果、①音階を移調した後にその音を聴き、音階の構造を観察する→②構成した音階を正確な音高で歌う→③感覚的に蓄積した音階を五線譜に書き表す、という活動過程から成立していることが明らかになった。移調を学ぶ活動では、音階のみならず、子どもが慣れ親しんでいる歌が教材として取り扱われていた。

これらの指導法のプロセスを示したマッケローニの意図は、①移調の方法を学ぶことを通して子どもに調性感覚を培わせること、②記譜することを通して移調するための音楽理論の知識を養わせること、③記譜・読譜力の育成、という3点である。

上述の内容から読み取ることができるよう、マッケローニのトーンバー指導法は記譜・読譜を含む、音楽の理論的な学習に主眼が置かれていることに特徴がある。本研究で取り上げた*Costruisco la scala*の前に位置する、音感ベル指導法が明示されている冊子である*Orecchio, voce, occhio, mano*では、音感ベルを用いてC durの音階における正確な音高感覚を培うことや、基本的な記譜・読譜力を身に付けることが目指されている(藤尾, 2014, pp.35-36)。そのため、これらの活動を通して習得した能力をもとに、C durの音階を基準として移調の学習や記譜・読譜の学習へと進んでいくトーンバー指導法は、音感ベル指導法から系統性があると言える。先述したように、モンテッソーリ教育法では、音楽教育に限らず、教具を用い

ながら活動することを通して、感覚で知覚したことに言葉を一致させるという教授方法が一貫して行われる。このようなことを鑑みても、モンテッソーリ教育法の枠組みのなかで、トーンバーを用いながら子ども自身が音階を構成することを基盤として、その後には音階の名称を学び、理論的な学習へと移行するマッケローニの指導法は、モンテッソーリ教育法に一貫した教授方法で進められていると言える。

しかし、マッケローニとモンテッソーリの音楽指導法を比較すると、2つの相違がある。1点目は、モンテッソーリは「(幼児期の)子どもは聴覚を用いて音を識別し、自分で真の音楽教育を進めていく。記譜等その他の音楽理論の活動は音楽とは相いれない (Montessori, 1917, p.332).」と述べていることから、幼児期の音楽教育では、子どもが音を正確に聴き分けることを通して良い耳を培うことを重要視していたのに対し、マッケローニのトーンバー指導法は、幼児期を含む5歳から7歳を対象年齢として設定されており、移調に焦点を当てた音楽理論の学習が中心に進められていく。このようなことから、音楽の専門的な内容を含む理論学習の導入時期という点において、両者の音楽指導法には相違がある。2点目は、音感ベルの活動では、子どもが主体的に自分だけで音高を聴き分け、音階を構成していくことが目指されていたが、マッケローニのトーンバーの活動内容は、複雑な音楽理論の学習を中核としているため、子どもが自発的に自分の力で学ぶというよりは、教師が中心となって学習が進められていくという点において異なる。

以上から、子ども自身は音楽を通して遊んでいると感じながらも、音楽的な力を培っていくことを目指す現在のわが国における幼児教育界では、理論的な学習を中心としたマッケローニのトーンバー指導法は受け入れ難いであろう。ただし、音楽の専門教育の観点から彼女の指導法について論ずるならば、音感ベルの活動から系統性を持たせながら、音楽の諸要素を段階的に学んでいくことのできる内容である。

注

1) モンテッソーリ教育法における音楽教育の考案者として、マッケローニの他に、E. B.バーネット (Elise Braun Barnett, 1904-1994) が挙げられる。バーネットはモンテッソーリの依頼によって、体系的なリズム活動を考案した人物である。しかし、マッケローニはバーネットと比較して、音楽教育に関する系統的な史料を圧倒的に数多く著している。このことから、モンテッソーリ教育法における音楽教育の考案は、マッケローニが貢献した部分が大きいと言える。

引用・参考文献

- 藤尾かの子 (2014) 「モンテッソーリ教育における音感ベルの学習過程の特徴—アンナ・マリア・マッケローニの音楽指導に着目して—」『音楽文化教育学研究紀要』XXVI, pp.31-38.
- 藤尾かの子 (2015) 「モンテッソーリ教育における A. M.マッケローニの音楽指導法に関する研究—*Music Book: The First Book* の検討を通して—」『音楽学習研究』第10巻, pp.119-126.
- 東屋敷尚子 (2012) 「モンテッソーリ教育における音楽指導の理念と内容—音楽的能力の育成と第2の言語としての音楽の可能性に着目して—」東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文.
- Maccheroni, Anna Maria. (1956). *Costruisco la scala*. Rome: Vita dell'Infanzia.
- Maccheroni, Anna Maria. (nda.). *Orecchio, voce, occhio, mano*. n.p., n.d.. (=nd). *The developing musical senses: the Montessori approach to music for the ear, voice, eye, and hand*. Trans.by Rosina Brienza. Santa Barbara: Greenwood Press.)
- Maccheroni, Anna Maria. (ndb.). *The Montessori music book*. Battersea: Salesian Press.
- Miller, Jean Karen. (1981). "The Montessori Music Curriculum for Children up to Six Years of Age." Ph.D. dissertation, Case Western Reserve University.
- Montessori, Maria. (1914). *Dr. Montessori's own handbook*. New York: Frederick A. Stokes company.
- Montessori, Maria. (1916). *L'autoeducazione: nelle scuole elementari*, Roma: P. Maglione & C. Strini. (=1917). *The Advanced Montessori Method: the Montessori elementary material*. Trans.by Arthur Livingston. New York: Frederick A Stokes Company.)
- Montessori, Maria. (1925). "Lecture 11th of International course in London" Amsterdam: Montessori Pierson Publishing Company.